

のバラックに落ちつく。天国だった。

夫は神田青果市場勤務。三年目に池袋に苦勞と借金で小さい家を見て、三十年ぼつぼつ夫に休養を考えて欲しいと思った五十七年と六十一年に病で倒れ、入退院のくりかえし、不自由な体となり、余儀なく家の建てかえまた借金。ふりかえるとき、悲しみのうちにも神仏の加護に感謝し、余生を戦争のない平和を願いながら全うしたい。

元山から恐怖の逃避行

岐阜県 青木 幸代

父は、北朝鮮の各郡庁、道立元山病院の事務局勤務を最後に定年退職し、老後は元山青果市場の事務所に通っていました。

父と十五歳の姉と、十二歳の私の三人。母は敗戦の前年に病死し、兄二人は兵役に服していました。

戦況が厳しくなってきたことを実感したのは、葛麻半

島に飛行隊が設置され、軍用機が飛びかい、陸海軍の兵隊が多く見られるようになったこと、空襲による類焼を防ぐために、鉄道沿線や街の密集地の家屋が強制移転され、取りこわしが始まったこと、防空壕が作られたり、米軍機による偵察機の飛来が始まったことなどからでした。

敗戦の年の三月、大村女子商業へ進学しました。ほとんど授業はなく、近くの農場で、ジャガイモづくりの作業がつづく毎日でした。

終戦の詔勅を聞いたのも、その農場でした。放送は雑音のため聞きとりにくく、内容も理解できませんでした。

敗戦による国家の権力が消滅したことにより、遠い異郷に放りだされた生活ほど、身を刻むような耐乏生活の苦しさ、命を削りとられるような不安におののく生活はありません。

老いて持病の喘息の父と、幼かった姉妹は、乏しい家財を売っては、少量の食料を入手しなければなりませんでした。

私たちの家も、朝鮮人が飲食店を開店するからと、店舗と二部屋を奪われ、奥の二部屋に息をひそめるような生活になりました。

ソ連兵は、日本人宅にやってきては、家財道具を奪ったりしました。私たちも頭髮を切り、貧しい男の子にように、ソ連兵がやってくる、いち早く床下のかくれ穴に身をひそめたり、朝鮮人の隣家にかくまってもらいました。

秋になり迫ってくる厳寒の前に、三十八度線を越えて帰国する邦人が、集団で、夜の闇の中を歩いていくのが見られるようになりました。

厳寒の冬になると、抑留所生活者に発疹チフスなどの伝染病や、厳しい労働による過労死、食料難による栄養失調や餓死がおそってきました。

病弱な父は、母の位牌とアルバムからはがしとった写真など、軽い荷にして背負った。姉と私は、おにぎり、米をリュックに詰めた。

五月なかばの十六日、日本人会の連絡で、二百人ぐらいの集団で、夜を待って闇の中を異様な姿の列が進ん

だ。

東海岸を徒歩で行き、途中の漁村で、闇船で三十八度線を越える計画とのことでした。途中の村を通りかかると、村人がとびだして、通行料の名目で寄付金を何度か強要された。

途中の小さい漁村での闇船の交渉をしながら進んだ。ようやく闇船をみつけて、ひとり千円の船賃で交渉がまとまった。

座ったきり身動きできない船の中、三十八度線を越すまではとがまんした。途中でソ連兵に見つかると引き戻されるのだ。沖合で、いろいろ口実に船賃の割増しを強要された。

ようやく三十八度線を越えて注文津に着いたとき、一同はその喜びにわきたった。注文津からは米軍の貨物船で下関への船路がはじまったが、いぜん立錐の余地のない船内生活の十日間でした。

小椀に少量の煮物だけの空腹と、身動きもできないきゅう屈さと、排泄の処理は脳裏に焼きつき、いまでもときおり思い出されます。

元山から下関まで恐怖の逃避行の二十日間の行程は、病弱な父には、座ったきりの足の関節と筋肉を衰えさせ、栄養失調は、持病を兀進させ、引揚げ後十一年、七十六歳で死亡するまで苦しみ通したことは可哀相でならなかった。

南鮮で兵役に服していた兄、予科練に入っていた次兄は、現地除隊後、単独に引揚げていて、私たちを迎えてくれた。

喘息に苦しむ父は、姉妹に連れて帰ってもらうことができた、死ぬまでいつも口にしていた。兄妹四人、それぞれ寮のある下場で働きました。

悲惨な戦争はあってはならないこと、国あつての国民であることを痛感したことから、君が代と日の丸のモチーフを胸に刻んでほしいと考えています。

終戦後、帰国をはたせなかった多くの人が、異郷で死んでいった。その怨念を忘れてはならないし、哀悼の意を表したいと思います。

むくわれずに、父母よ

山口県 高木 徳子

私たちは、亡き父母が若い頃、朝鮮に渡り、私は朝鮮で生まれ育ちました。

父母にはいろいろの苦勞があつたと思いますが、私は、京城（ソウル）の郊外の永登浦という所で幼稚園、小学校、女学校に通い、不自由なく暮らしており、終戦を迎えました。

父は朝鮮の土になると決めていたようですが、全員引揚げの通達があり、それではと準備に取りかかりました。持てるだけの荷物を持って帰り、後の荷物は決められた個数だけ、政府が責任をもって預かり、人員輸送がすみしだい送るからといわれ、指定の倉庫まで自動車で運びこみましたが、その荷はついに帰らず、没収されてしまいました。

大人から子どもまで、自分にあうリュックを作り、そ